

焼鳥と非軍事

—— 坂口安吾「もう軍備はいらない」論 ——

福岡 弘彬

一、「焼鳥」の記憶

二、再軍備への欲望

三、議論の土台

四、「焼鳥」と非論理・非倫理

五、「戦争」のただなかで思考する

坂口安吾が空襲の記憶を記す際に「焼鳥」という^{カタクレシズ}カクレーシズ 喩を繰り返し用いたことを重視し、「焼鳥」を眼前にした過去の「戦争」のただなかでいま・この「戦争」を予感する、「もう軍備はいらない」（『文学界』昭27・10）について考察した。朝鮮戦争を大きな契機として再軍備化に舵が切られていく情勢の中で、酔っ払いがくだを巻くかのように非軍事を説く本作は、「焼鳥」をめぐる非論理・非倫理を文章化し、「戦争」を表象しようとする。「私」と「オレ」に分裂し、「焼鳥」になるプロセスを辿る言葉の運動性は、再軍備肯定論者が人間と「動物」を区画し、セキユリテイによって自分たちを守ろうとする欲望を、切断するものであった。さらにその非軍事への欲望は、軍事―産業―資本主義の回路からも逃れていく。本作は、危機を煽り立てられ、自らを「焼鳥」とは無関係の者として生きるあらゆる時空の人々へと、非軍事を呼びかけている。

一、「焼鳥」の記憶

三月十日の大空襲の焼跡もまだ吹きあげる煙をくぐつて伊澤は当もなく歩いてゐた。人間が焼鳥と同じやうにあつちこつちに死んでゐる。ひとかたまりに死んでゐる。まつたく焼鳥と同じことだ。怖くもなければ、汚くもない。犬と並んで同じやうに焼かれてゐる死体もあるが、それは全く犬死で、然しそこにはその犬死の悲痛さも感慨すらも有りはしない。人間が犬の如くに死んでゐるのではなく犬と、そして、それと同じやうな何物か、ちやうど一皿の焼鳥のやうに盛られ並べられてゐるだけだつた。犬でもなく、もとより人間ですらもない。

坂口安吾「白痴」(「新潮」昭21・6)で、伊澤は焼跡をさまよひながら、「焼鳥」同様になつた死体を目にする。「ひとかたまり」になつた死者たちを前にして「怖」さも「汚」さも感知しなくなつた彼の目線から描写される「焼鳥」の有様は、複雑で異様だ。「犬」と「同じやうな何物か」に変成した死体は、「焼鳥と同じやうなものであり、だがそれは「犬でもなく、もとより人間ですらもない」という。どうということか。

まずもつて、人間の人間性が剝奪された死に様——死し

て動物と同列化した人間たち——が表されていることは確かだろう。例外状況における人間と動物の境界をめぐる問題が浮上するこの箇所から、さらに抽出すべきは、大空襲とは死んだ人間を指し示す言葉を失うような災禍であるということであり、そしてそのただなかの「死」を表すための言葉が探される過程が、「白痴」には記されているということだ。直喩や否定の言葉の頻出には、表そうとする光景が滑らかに言語化できる類いのものではないこと、そしてそれをなんとか言葉にしようとする葛藤が、同時に表出している。例外状況——カラストロフィにおいて「死」や「人」や「犬」や「焼鳥」という言葉たちはそれまでの指示対象と切り離されており、死者を眼前にした生きている者も、通常ならば起こるべき情動——「怖」さ「汚」さ「悲痛さ」「感慨」——を引き抜かれている。別様に言えば、そこでは日常を構成するための言葉が壊れている。言語化できない光景を表現するために、壊れた言葉を手繰り寄せプリコラージュするようにして紡がれた結果が、右のように捻れて蛇行する文章なのだろう。

そこで死体は、人間のようでもあり犬のようでもあり、だが「犬でもなく、もとより人間ですらもない」。死者たちは「犬」と接続/切断されながら、人間に本来生起すべき情動を起こさせない何かとして描かれる。「焼鳥」とは、

だから、死んだ人間がただの焼けた肉塊へと変成するという事態以上のことを表すための「濫」^{カタクレーシス}喩である。その「濫」^{カタクレーシス}喩は、人間性が剝奪された臨界状況における、既存の言葉では表せない「死」の感知を、言葉の基底にもつ。敢えて言えば、「焼鳥」という「濫」^{カタクレーシス}喩には、空襲下においてどうにもうまく名指すことができない「死」を表そうとする、模索の言語行為が刻み込まれている。

「白痴」の登場人物である伊澤も、その物語を語る語り手も、作家・坂口安吾とは異なる存在であることは言を俟たないが、それでも彼らを同一線上に重ねて考えたくなくなるのは、安吾がその後のエッセイや評論の中で、繰り返し「焼鳥」の記憶について記したからだ。人間が「焼鳥」に変成してしまった空襲下の光景は、後年になっても生々しく語られた。

焼死者を見ても焼鳥を見ても全く同じだけの無関心しか起らない状態で、それは我々が焼死者を見なれたせいによるのではなくて、自分だって一時間後にこうなるかも知れない。自分の代りに誰かがこうなっているだけで、自分もいずれはこんなものだという不逞な悟りから来ていたようである。別に悟るために苦心して悟ったわけではなく、現実がおのずから押しつけた不逞な悟りであった。どうにも逃げられない悟りであ

る。(坂口安吾「明日は天気になれ 桜の花ざかり」
「西日本新聞」夕刊、昭28・4・5)

「白痴」ほど捻れた表現ではないものの、見る者に「無関心しか起らない」「焼死者」が、「焼鳥」とつなげられている。だが「白痴」よりも掘り下げて語られているのは、「無関心」の要因だ。それは、「焼鳥」と生きている者の境界が保てない——「自分もいずれはこんなものだ」——という「悟り」がもたらすのだという。爆撃下において、生者と死者を分かつものは偶然でしかないという事実。「焼鳥」の言葉は、その「現実」の偶有性を感じした「自分だって一時間後にこうなるかも知れない」という「不逞な悟り」をまた基底にしている。空襲下において、爆弾も焼夷弾も、誰と彼とを選別して降り注ぐわけではなく、生きている者はたまたま生きているのであり、その生はたまたま死んだ「焼鳥」と常に隣接している。生／死の境界は論理的なものでなく、誰もがそこでは「焼鳥」になり得た——。

言葉も論理も壊れたカタストロフィのただなかにおける、名状しがたい死が、それも自分と密着した死が、「焼鳥」という語に込められている。それは戦後に生きる安吾が折に触れて立ち戻る地点でもあった。その意味で、「焼鳥」とは、安吾のトラウマティックな記憶が刻印された言葉と

して捉えることもできる。

ただしこの記憶が、過去の「戦争」のトラウマとして表されるのではなく、いま・ここで「戦争」を考えるための起点とされた文章がある。本稿で考察しようとする「もう軍備はいらない」（「文学界」昭27・10）だ。日本の再軍備化が進む時期に発表されたこの作品は、もう一度人間が「焼鳥」になる危機が訪れたとき、過去の「戦争」の記憶とともに未来を語るとはどういうことなのか、読む者に問いをつきつける。

その名の通り再軍備を無用のものとする「もう軍備はいらない」は、先取りすれば、支離滅裂な文章である。後に詳述するように、一度「戦争」が始まれば自分も「原子バクダン」を用いると悪びれずに語り、途中には「私」と「オレ」という主語が入り交じり、まるで酔っ払いがぐだを巻くかのように、軍備について語る。日本の再軍備化という大きな出来事を問題化する文章としては、破格だ。だが、非論理的で非倫理的なその文章こそが、「戦争」そのものを表象しようとする、そして再軍備を肯定する者たちのもつ欲望を切断しようとすることを明らかにする。

「焼鳥」という濫^{カタクレシネス}喩を手放さずに非軍事を語る本作は、過去の「戦争」のただなかに身を置きながら、「戦争」が始まろうとするいま・この情勢を思考しようとしている。

その「もう軍備はいらない」という言葉は、わたしたちにも呼びかけるだろう。過去の「戦争」が忘れられ、歴史が改竄され、危機を煽られ、味方／敵の境界意識を前提化することで、なし崩しに軍備が着々となされて行く、すなわちいま・ここにいる、わたしたちに。

まずは、当時の状況を復元しながら、再軍備への欲望がいかなる力学によって生じるのか、考えることから始めた。

二、再軍備への欲望

日本の再軍備は、冷戦構造におけるグローバルなミリタリズムの展開としてある。自衛隊の前身である警察予備隊の創設は、周知のように、昭和二年六月二五日に勃発した朝鮮戦争が大きな契機となった。駐留米軍が朝鮮へと派遣され「空白」となる日本に対し、マッカーサーはそれまでの占領における非軍事化方針を転換する。七月八日、七五〇〇名からなる国家警察予備隊の設置と、海上保安庁現有海上保安力の八〇〇〇名増加を要請し、日本政府は八月一〇日に警察予備隊令を公布、即日施行。米軍の不在により防備が手薄になった日本が共産圏から侵略されるのを防ぐ必要から、警察／軍隊どちらともつかない軍事組織が、GHQ主導の下で整えられていくのである。⁽¹⁾その後昭和二

七年四月二八日のサンフランシスコ講和条約、日米安全保障条約発効を経て、同年一〇月一五日に警察予備隊は保安隊へと改編され、昭和二九年七月一日に陸海空自衛隊が発足するに至る^②。

警察予備隊が創設された後、再軍備については多くのメディアでトピックとされ、文学者も様々な意見を提出した。特に「もう軍備はいらない」が発表された時期は、占領終了とそれに連なる安保の問題や、保安庁の発足・警察予備隊の保安隊への改編の問題もあり、再軍備に関する議論は紛糾していた^③。本作は「文学界」昭和二十七年一〇月号の特集「再軍備と作家」に掲載された文章であり、同欄には他に石川達三、なかの・しげはる、阿部知二、武者小路実篤、林房雄、正宗白鳥が評論を寄稿している。

「もう軍備はいらない」の次に並んで掲載されたのが林房雄「再軍備は必要だ」であることから分かる通り、同誌上においてもポレミカルな場が形成されている^④。まずは林の論を読解しながら、現代まで続く、再軍備を必要とする者の論理を追おう。

「現代に生きてゐて、戦争が好きだと言ふ人間がゐたら、狂人でなければ悪党である」と林が述べるように、軍備の必要を説くからと言って、それが戦争を肯定することに直結するわけではもちろんない。「現代の戦争には」「大量虐

殺があるだけ」で、「原子爆弾の被爆写真を見せられなくとも、普通の神経と思考力を持つてゐる者なら、現代人はすべて男女老幼を問はず非戦論者であり厭戦家である」。

「戦争はいやだ。平和がほしい。」と述べる林は、戦争のない「世界国家」の実現がいつか訪れることを確信すると述べるのだが、「世界国家が成立するまでは、戦争はある」ことも断言する。念頭に置かれているのは、むしろ冷戦だ。林は「いつ勃発するとも限らない」「戦争」をどうやり過ぎることができるか、五つの空想を披瀝した後に、再軍備を肯定するに至る。

私は最後の空想に取りすが。日本人が日本を守るための武力を持つといふことだ。何とかして自力で日本を持ちこたへ、地球国家の実現に積極的に参加するといふ空想であり、逃げまはつても逃げ場所はない。第二の朝鮮になるのは、真つ平御免だ。警察力だけでは間にあはない。日本を守る日本軍がほしい。

地球全体を潜在的な戦場と化し、諸国家をアクターとして動員する冷戦状況においては、いつ日本が矢面に立つかわからない。現に、その舞台となった朝鮮では、多くの人々が亡くなっている。ならば、「日本人」が「日本」という国土を防衛するための、軍備Ⅱセキュリティが必要である。林に感知されているのは、戦場と化したすぐ傍らの朝鮮で

あり、そこで起きている大量死だ。セキュリティがなければ攻め込まれ、「日本人」は「朝鮮人」のように死ぬことになる——。隣国と同じ轍を踏むことの恐怖に憑かれ、それを回避しようとする林は、「真つ平御免」という言葉とともに、再軍備を欲望する。

われわれ日本人を守るためのセキュリティを希求するということが、恐怖におおられ生起するこの欲望について考えるとき、金杭『帝国日本の鬪』（平22・12、岩波書店）は重要だ。金は同書において、死の恐怖に捕えられ、剥き出しの生となることを怖れた個人が、セキュリティの内側の人間—国民となろうとする、その力学を記している。「国家が生成するためには、まず何よりも、個人がただ生きる動物にならねばなら」ず、「この無力な動物なしに、敵の脅威に恐れおののき、国家の民へと跳躍する人間は生まれ得ない」（二七二頁）。「無力な動物」を「敵の脅威」から守る力能として「国家」は「生成」するのであり、「無力な動物」と同様に殺されることを回避しようとする決断こそが、「国家の民」を生む。「セキュリティの場とは、この国家生成の原初的な場面なのである」（同上）。

「日本を守る日本軍がほしい」という林の言葉は、隣国の「無力な動物」と同様になることに「恐れおのの」いた者が、人間として生存しようという欲望に基づく。この言

葉は、生き残るべき日本人と、日本という領土とともに画定する限りにおいて、国民—国家—セキュリティを同時に生起させる。この欲望はもちろん、サンフランシスコ講和条約によって占領が終結し独立国となった日本における、国家および国民の主権回復という出来事とも呼応している。さらに林は同論で、「集団強盗にそなへてピストルを買ふ」ことよって「一家中が安心して働けるやうになれば、家の経済は却つて楽になるといふ経済現象もあり得る」とも述べる。「敵の脅威」から軍備によって守られることが、安全圏における経済的繁栄をもたらすという見取り図は、軍事—産業—資本主義が絡まりあう社会を肯とすることに連なっていくのである。こうして冷戦下の恐怖から逃げ延びようとする「空想」の中で、戦争機械が国家に組み込まれることを願う林は、軍事—産業—資本主義の利害秩序に従属したまま、強大な権力を渴望する、偏執狂的な欲望を走らせる。そしてこの欲望は、冷戦が終結した世界でも、危機をおおられ「敵」を見定め、あらゆる場所に偏在しているはずの「動物」的生を顧みることのないままわれわれ日本人は生き残ろうとする、いま・ここにおける軍備への感覚と地続きになつていゝものだ。

三、議論の土台

林とは真つ向から対立するタイトルをもつ「もう軍備は
いらぬ」にも、林と共有されている重要な論点が幾つか
ある。「冷い戦争という地球をおおう妖雲」（初出六九頁、
以下頁数のみ記す）という言葉があるように、この論は地
球規模の冷戦下という現状の下で記されている。また、戦
争においては人間が「動物」のようになってしまふ、とい
う認識も共有されている。それは前述した「焼鳥」であり、
さらに本作の中で「焼鳥」の記憶のトリガーとなつてい
るのが、林も述べていた原爆の写真であつた。本作は以下
のように始まる。

原子バクダンの被害写真が流行しているので、私も
買つた。ひどいと思つた。／しかし、戦争なら、どん
な武器を用いたつて仕様がなじめないか、なぜヒロ
シマやナガサキだけがいけないのだ。いけないのは、
原子バクダンじゃなくて、戦争なんだ。（六六〜六七
頁）

サンフランシスコ講話条約の発効により、原爆の被害に
ついでに報道が解禁され、この時期相次いで広島や長崎の
被爆直後の惨状を伝える写真が発表されていた。それを見
たという安吾は、だが過激な言葉で「ヒロシマ」「ナガサ

キ」の出来事の単独性を無視し、自らの経験へとつなげて
いく。「東京だつてヒドかつたね。」「公園の大きな空壕の
中や、劇場や地下室の中で、何千という人たちが一かたま
り折り重なつて私の目の前でまだいぶつていたね。」（六七
頁）と、語りかけるような口調で記されるのは、空襲下
における自身の眼前にあつた「一かたまり」の死者たちであ
る。そしてその光景は、また他の場所へと重ね合わされる。
「サイパンだのオキナワだのイオー島などで、まるで島の
害虫をボクメツするようにして人間が一かたまりに吹きと
ばされても、それが戦争なんだ」（同上）。

カタカナが織り交ぜられた碎けた文体で、戦争における
大量死について記される本作の冒頭は問題含みだ。「ヒロ
シマ」も「ナガサキ」も「サイパン」も「オキナワ」も
「イオー島」もそして「東京」も、当然ながら個別の出来
事であり、そこにおける死者たちの死もまた、それぞれの
単独性を抱え込む。しかし本作がそれを凝視することはな
い。「ヒロシマ」や「ナガサキ」の表記に「アメリカの原
爆使用また広島、長崎の原爆被災という出来事全体」を表
そうという意図が介在しているとも思われず、むしろ
「バクダン」や「ボクメツ」などのカタカナ表記と並列さ
れることによって、それぞれの場の固有性は消されるかの
ようだ。

だが繊細さを欠いたこうした言葉によって、安吾は「戦争」そのものに照準を合わせていく。戦場に横たわる差異を飛び越え、串刺しにし、人間を人間ならざるものへと変成させる「戦争」こそを、本作は問題化しようとする。そしてその言葉は、安吾自身の空襲体験を土台としている。

私もあのころは生きて再び平和の日をむかえる希望の半分を失っていた。日本という国と一しよにオレも亡びることになるだろうとバクゼンと思いふけりながら、終戦ちかひころの焼野原にかこまれた乞食小屋のような防空壕の中でその時間を待つ以外に手がなかつたものだ。三発目の原子バクダンがいつオレの頭上にサクレツするかと怯えつづけていたが、原子バクダンを呪う気持などはサラサラなかつたね。オレの手に原子バクダンがあれば、むろん敵の頭の上でそれをいきなりバクハツさせてやつたらう。何千という一かたまりの焼死体や、コンクリのカケラと一しよにねじぎれた血まみれのクビが路にころがっているのを見ても、あのころは全然不感症だった。美も醜もない。死臭すら存在しない。屍体のかたわらで平然とベントーも食えたであろう。一分後には自分の運命がそうなるかも知れないというのが毎日のさしせまつた思いの全部だから、散らばつてる人々の屍体の変テツモない自然の

風景にすぎなかつた。(六七頁)

「何千という一かたまりの焼死体や、コンクリのカケラと一しよにねじぎれた血まみれのクビ」が「自然」化し、それを見ている人間から「美も醜も」「死臭」への感覚も良心も失わせるという状況。「一分後には自分の運命がそうなるかも知れない」と、生／死の境界がなくなつてしまつた状況。他の作品で記されてきた空襲下の記憶が変奏されている。そして作品の終盤では、「まるで焼鳥のように折り重なつてる黒コゲの屍体の上を吹きまくつてくる砂塵にまみれて道を歩きながらイナゴのまじつた赤黒いパンをかじつていたころを思いだすよ。」(七十二頁)と、やはり空襲下の死が、「焼鳥」として表現される。

林と同様の認識——一度「戦争」になれば、人間が「動物」のように、「害虫」のように、「焼鳥」のように、無惨に殺されてしまう——を安吾は共有し、林以上にその状況のむごさを詳細に記している。だが、だとすれば——二度と「動物」にならないために、林と同様に自衛のための軍隊を求めたとしてもおかしくないのではないか？ 現に、アジア・太平洋戦争を生き延びた当時の人々の中にも、戦前と同様の軍隊や徴兵制が復古することを忌避してはいても、国防のための軍を望む声は多数あつたのだ。¹⁰⁾「戦争」は人を「動物」にする、だから、「もう軍備はいらない」と

言い切る安吾は、どのように林たちの紡ごととする論理から逃れていくのか？ 言い換えるならば、偏執^{パルノイア}的な欲望を回避する言葉の運動性とはどのようなものか？

四、「焼鳥」と非論理・非倫理

重要なのは、本作が幾重にも表そうとする、戦争の非論理と非倫理である。「もう軍備はいらない」は、敢えて繰り返せば、酔っ払いがくだを巻いているような破茶滅茶な文章だ。先の引用傍線部では、「私」で語り出されていたはずの主語が、「オレ」へと変化しており、あたかも酩酊しながら語っているかのようだ。発表当時、軍備についての議論の多くが、論理的に整理された「論」によってなされていた状況の中で、ここにある言葉は異質と言っている¹¹。既に述べたように、「ヒロシマ」「ナガサキ」「サイパン」「オキナワ」「イオー島」「東京」の個別性を無視する論法も強引だ。また、戦時中に自分が原爆を持つていれば使っただろう、と悪びれずに述べる言葉も、過激である。

だが、そうした無茶苦茶で破格な文章は、本作が表そうとする、「戦争」そのものの、あるいは戦場における死の、非論理性と対応している。「原子バクダン」は「ひどい」から用いてはならない、全ての戦場もそこにおける死もそれぞれの単独性をもつ、そうした論理は、本論が炙り出そ

うとする「戦争」の前では意味をなさない。なぜなら「戦争」は、一人ひとり単独性を持つとされてきたはずの人間を峻別することなく、「一かたまり」の「焼鳥」にしまうからだ。なぜある者は生き延びてなぜある者は死んだのか、その生／死を分かť論理的な境界が瓦解し、どのような人間であろうと問答無用に「焼鳥」に化すという不条理こそを、本作は問題化する。「もう軍備はいらない」の非論理的な言語は、人間の人間性を前提とした論理を粉々にする「戦争」を表象しようとしている。別様に言えば、人間の人間性が保持された日常を構成する言葉が壊れてしまった非常時―例外状況が、言葉の運動によって表されようとしているのである。

そして、「戦争」によって人間性が剝奪された「焼鳥」の前では、倫理も灰燼に帰する。情動や感覚が「焼鳥」の傍らでは引き抜かれてしまうことは既に見たが、ここでは戦場における倫理の問題について端的に述べられた、小平事件¹²についての記述を見よう。安吾は戦時下において「女の子を強姦しては殺していた」小平義雄を、「人を殺して自分の生きのびる手段にしようという尋常な良心」を有していた「妙な奴」とする。安吾曰く、「一時間後には自分がどうなるか分りやしないということが唯一の人生の信条となりきつていた筈のあの最中」には、日常を構成するモ

ラルが機能しなくなってしまうことが普通であり、小平のように「自分の罪を隠すために人を殺す」というような平常の心がチャンと時計のように動いているのは異常なこと」である（以上六八頁）。

あの時の大半の人間というのは自分の手で人を殺すことも忘れていたようなものだ。どうせみんな死んじまい、焼けじまい、バラバラになつちまうんだ。

我々の理性も感情も躰けもみんな失われ一変して、戦争という大ききのケタの違うデカダンが心や習性の全部にとつて代つていたのだ。「…」／＼いつたん戦争になつちまえば、健全なのは小平君ぐらいのもので、人間は地獄の人たちよりもはるかに無感動、無意志の冷血ムザンな虫になるだけのことだ。おそらくそのとき何が美しいと云つたつてサクレッツする原子バクダンぐらい素敵な美はないだろう。あの頃でも自分をバクゲキにくる敵の飛行機が一番美しく見えた。そして、その美を見ることができた代りに死ななければならぬということとは、たいしたことじやアないのさ。人を殺すのが戦争じやないか。戦争とは人を殺すことなんだ。（同上）

「原子バクダンぐらい素敵な美はないだろう」という言葉は、酔っ払いの冗談では済まされぬほどに、端的に非

倫理的な言葉である。だがやはりこの非倫理的な言語運用も、「焼鳥」の前における非倫理を発語の位相で表すものとなつてゐる。「戦争という大ききのケタの違うデカダン」の前では、人は「無感動、無意志の冷血ムザンな虫になる」。「理性」も「感情」もそして倫理も、圧倒的な破壊の前で、「焼鳥」の傍らで、死を自らのものとして感知した者には、関係がない――。

大澤真幸「ナシヨナリズムと「ふるさと」」（坂口安吾研究会編『坂口安吾 復興期の精神』平25・5、双文社出版）は、本稿冒頭に引用した「白痴」における「焼鳥」と、非倫理の関係について記している。大澤はジョルジョ・アガンベン『アウシュヴィッツの残りのもの』（上村忠男・廣石正和訳、平13・9、月曜社）を参照しながら、ユダヤ人強制収容所において意思も反応も失い生きる屍と化した「ムーゼルマン」と、安吾が見た「焼鳥」になる直前の人間を重ね、その者たちを眼前にした状況では「倫理は停止する」と述べた。「過酷な状況であらゆる希望を失った人たち」に対して「倫理的な発言をすると、逆にそれは最も非倫理的で最も冒瀆的になつてしまう」からだ。この大澤の指摘した非倫理について、本作を読解することで、さらに考察を深めることができる。すなわち生／死を分かち論理が壊れ、「焼鳥」に自らがいつなるとも知れない状況の

中で、人間は「無感動、無意志の冷血ムザンな虫」となり、倫理は停止する。

この地点で、「焼鳥」とそれを前にした人間は既に同じものとなっている。「焼鳥」のように殺されてしまった者——先に引用した箇所では「害虫」（六七頁）とも述べられていた——を眼前にした人間も、「無感動、無意志の冷血ムザンな虫」なのだから。「焼鳥」——「動物」——「害虫」の傍らにいる者もまた、人間ではない。「虫」でしかない。

「人を殺すのが戦争じゃないか。戦争とは人を殺すことなんだ。」と倒置反復によって強く念を押される言葉の射程は、兵器による殺人という現象だけでなく、「戦争」において人間性が破壊されるという事態にまで行き届いている。

「動物は恥辱を知らずに死んでゆく。ただひたすら死んでゆくだけの動物に恥辱の契機は訪れない」（佐藤嘉幸・廣瀬純『三つの革命』平29・12、講談社、二五二頁）。佐藤・廣瀬が、ドゥルーズ・ガタリから引き出した革命の契機は、「死せる動物でしかない」マイノリティを前にしたマジオリティによる、自らがマジオリティであることの「恥辱」の感知にあった。だがここではそれは起り得ない。「焼鳥」を見ている者も、「恥辱の契機」を引き抜かれているからだ。「雨に打たれて誰かが死んだ。それがオレでなかっただけの話にすぎないのである」（六八頁）。生／

死の境界がなくなった「戦争」の非論理と非倫理において、人間と「焼鳥」の境界もまたなくなっており、戦場の偶有性を感じた「オレ」の言葉には、その記憶が密着している。だとすれば——「私」で語り始められながら、「オレ」へと分裂し、戦場の記憶に浸る本作の言語運用とは、人間が「焼鳥」になるプロセスなのではないか。安吾は「焼鳥」の記憶を語ることで、戦後七年経った地点において、「焼鳥」になりながら、現在の再軍備という情勢を思考しようとしているのではないか。

この「焼鳥」になるプロセスのただなかで、軍備を求める欲望は切断される。「焼鳥」になろうとする人間にとって、「動物」と人間の境界は成り立たないのだから。再軍備肯定論者が人間と「動物」を区画し、自分たち人間の生き残ろうとするセキュリティの論理を、「焼鳥」になろうとする者の非論理・非倫理は破壊してしまう。もともとらしく「日本を守る日本軍」を求めたところで、一度「戦争」になれば全ての存在は「焼鳥」——「虫」になってしまう。だから、「もう軍備はいらない」。

国家と国民の主権回復に加速させられた偏執狂的な欲望が軍備を語るただなかで、「オレ」が割って出る。分裂者は「だから」へと跳躍し、非軍事への欲望をドライブさせていく。非論理的で非倫理的な、敢えて言えば壊れた言語

の運用によって、言葉が壊れた壊滅的状况を表象すること。安吾はそのことによって、「動物」とわたくしたち日本人を区別し、前者の犠牲のもとに自分たちの命を守ろうとする。セキユリテイの論理とは違う線を引こうとするのだ。

さらに、分裂者は、軍事―産業―資本主義の利害秩序からも逃れていく。

五、「戦争」のただなかで思考する

「焼鳥」の記憶が語られた後、再軍備が無用のものであることが、特に「戦争」と経済の観点から記されている。

「自分が国防のない国へ攻めこんだあげくに負けて無腰にされながら、今や国防と軍隊の必要を説き、どこかに攻めこんでくる兇悪犯人が居るような云い方はヨタモンのチンピラどもの言いぐさに似てるな。」(六九頁)と、再軍備を肯定する者たちが強迫観念的であることを指摘し、「素寒貧」な「貧乏ぐらし」をしている日本に「間抜け泥棒が忍びこむよりも、このオヤジが殺人強盗に転ずる率が多いのは分りきつた話」(同上)と、国防のためにはずの軍隊が侵略に転ずる危険性を見る。「ピストルやダンピラを枕もとに並べ、用心棒や猛犬を飼つて国防を厳にする必要があるのは金持」だが、「金持になつて、おまけに泥棒の心配をせずにすむなら、これに越したことはない」と述べる安

吾は、「莫大な預金、広大な所有地」とは異なる、「泥棒がどうすることもできないような財産」の必要性を説く(六九―七〇頁)。それは、「生活自体の高さや豊かさ」である(七〇頁)。一部の「金持」が資本を独占するのではなく、「美しい芸術を創つたり、うまい食べ物を作つたり、便利な生活を考案したりして、またそれを味うことが行きわたつていような生活」が、「国民全部」のものとなつていれば、それを「守るために戦争することも必要ではなくなる」と、「戦争」を免れる道を掲げる(同上)。

本作はさらに、「国民の生活以外に盗むものがない」国に対して、もし「キ印」が「盗みを働きにくる」としても、「さつさと手をあげて降参して相手にならずにい」るべきと無抵抗主義を説くのだが(七〇頁)、ここで重要なのは、安吾が「戦争」を市場とのつながりの中で捉え、それを切断するための回路を打ち出そうとしていることだ。「軍備をととのえ、敵なる者と一戦を辞せずの考えに憑かれている国」を「みんなキツネ憑き」(七一頁)とした上で、本作は以下のように述べる。

戦争や軍備は割が合わないにきまつているが、そのために大いに割が合う少数の実業家や、そのために職にありつける失業者や、今度という今度はギヤバ族のアラモード、南京虫、電蓄、ピアノはおるか銀座をそ

ツくりぶツたくツてやろうと考へながらサツマイモの畑を耕している百姓などがあちこちにいて軍備や戦争熱を支持し、国論も次第にそれにひきずられて傾き易いということとは悲しむべきことではあるが、世界中がキツネ憑きであつてみれば日本だけキツネを落すということも容易でないのはやむを得ない。けれども、ともかく憲法によつて軍備も戦争も捨てたというのは日本だけということ、そしてその憲法が人から与えられ強いられたものであるという面子に拘泥さえしなればどの国よりも先にキツネを落す機会にめぐまれているのも日本だけだということは確かであろう。(七一七二頁)

「世界中がキツネ憑き」となつてゐる冷戦下において「軍備や戦争熱」を下支えするのが何であるのか、安吾は射抜こうとする。表面では「攻めこんでくる兇悪犯人」への対策としての軍備を求めていたとしても、その欲望は軍事―産業―資本主義に備給されたものである(林が「集団強盗にそなへてピストルを買ふ」ことで「家の経済は却つて楽になる」と述べていたことを思い出そう)。「戦争」による生産、消費¹⁵、領土獲得、資源獲得の利潤への欲望は「戦争」を駆動し、資本主義の運動を補完するのだ。

「世界中がキツネ憑きであつてみれば日本だけキツネを

落すということも容易でない」、だが憲法九条を有することによつて「どの国よりも先にキツネを落す機会にめぐまれているのも日本だけだ」。分裂者^{スッキツ}はグローバルなミリタリズムが展開する情勢の中で、軍事―産業―資本主義のフローを感じし、その利害秩序に従属した欲望から逃れていく。そこで欲望されるのは、未だ見ぬ「一等国」だ。現状の日本は「四等国」だが、「地球上には本当の一等国も二等国もまだ存在」しない(七一頁)。「軍備や戦争をすてない国は永久に一等国にも二等国にもなる筈ないさ」(七二頁)。むろんここには、「日本人」と「日本」の紐帯を前提とした国民国家への指向はない。すなわち「一等国」の語には地球上どこにもない、未発の未来が賭けられている。

「戦争」と利潤への欲望との連なりが語られた後に記される、「この地上に本当に戦争をしたがつてゐる誰かがいるのであろうか。」(七二頁)という問いかけは、未来における「戦争」を決定事項¹⁶前提としてセキュリティを求め欲望が、軍事―産業―資本主義に追従したただけのものでしかないという分析に基づいている。そしてこの問いかけの直後に、「まるで焼鳥のように折り重なつてる黒コゲの屍体の上を吹きまくつてくる砂塵にまみれて道を歩きながらイナゴのまじつた赤黒いパンをかじつていたころを思い出すよ。」(七二頁)と、「焼鳥」の語が表される。ならば、

「焼鳥」とは、地球上で「キツネ憑き」が跋扈する状況のただなかで、「戦争」を予感する語でもあるだろう。

占領が終了し主権を回復した国家の下で、己一日本国民を守ろうと偏執狂的な欲望に衝き動かされた者たちが、危機を叫び次の戦争に備えようとする中で、分裂者は「戦争」のただなかに身を置いて、利害的秩序から逃れ、情勢を思考する。前の「戦争」を終わったものとせず、「焼鳥」になりながら、いま・この「戦争」の足音を感じして、それにノンを突きつける。過去の「戦争」を記して「戦争」を予感し、そこから逃れようとする。言葉が壊れた状況を起点とし、「焼鳥」の語——死と密着した経験が織り込まれた濫喩——を用いる本作の言語運用は、いま・ここに潜在する「焼鳥」への回路を感じし、「焼鳥」になることは異なる未済の未来を手繰り寄せようとするものでもあるのだ。

危機を煽り立てられ、軍事費が膨れ上がる中で、自らを「焼鳥」とは無関係の者として生きるあらゆる時空の人々へと、分裂者は呼びかける。「もう軍備はいらない」。

注

(1) 警察予備隊は当初は国内治安対策のための部隊とされていたが、朝鮮戦争の激化とともに重武装化が進められていく。

葛原和三「朝鮮戦争と警察予備隊」(「防衛研究所紀要」平18・3)を参照。

(2) 佐道明広『自衛隊史』(平27・11、筑摩書房)などを参照。

(3) 例えば昭和二十七年五月の「世界」では特集「再武装問題を直視せよ」が、同年一月の「中央公論」では「日本再軍備問題特集」が組まれており、前者には中野好夫「道義破壊の責任を負うもの」や伊藤整「我々は恐怖のために滅びる」が掲載されている。双方の論や、あるいは「もう軍備はいらない」と同特集に掲載されている再軍備についての評論の他にも、伊藤永之介「予備隊へ」(「群像」昭27・9)や辻亮一「宿借」(「文学界」昭28・3)などの小説、火野葦平「予備隊一日入隊記」(「文芸春秋」昭27・11)のようなルポルタージュ、田村泰次郎・武田泰淳・檀一雄・梅崎春生・野間宏・源氏鶏太・今日出海による座談会「兵隊作家は再軍備をどう考えているか」(「週刊朝日」昭27・6・22)など、様々な方法で、文学者は再軍備の問題について表現していた。

(4) 他に武者小路実篤「軍備と戦争」も、再軍備の必要を説いている。

(5) 以下、五つの「空想」を列挙する。一：「世界の最終戦争なしに、世界国家が成立すること」「アメリカとソ連が手を握って、戦争の終結と地球国家の成立を宣言すること」。二：「アメリカとソ連が正面衝突し、どつちかが勝つて、武力の競争者がなくなり、戦勝国の武力の下に世界が統一されること」。三：「絶対中立」。四：「戦鬪的平和主義」「人類の正義によびかけて、平和を守る。そのためには殺されてもいい」。五：「ノアの箱舟をつくつて、地球の外に脱出すること」。

(6) 偏執狂および、本稿で以下に用いる分裂者の概念については、シル・ドウルーズ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス 下』（宇野邦一訳、平18・10、河出書房新社、二九八頁）の次の説明に依る。「パラノイアの備給と分裂気質的備給とは、いわば無意識的なりビドー備給の対立する二極をなす。一方の極「パラノイアの備給」は、主権組織体やこの主権組織体から発生する群居性集合に欲望的生産を従属させる極であり、他方の極「分裂気質的備給」は、逆の従属関係を表現し、権力を転覆して、欲望生産の分子の多様性に群居性集合を従属させるのだ。」

(7) 山本昭宏「核と日本人」（平27・1、中央公論新社、一九〇～二〇頁）。特集「原爆被害の初公開」が掲載された「アサヒグラフ」（昭27・8・6）は、五〇万部が売り切れ増刷されたという。本作で安吾が「買った」としている文献は特定できないが、『坂口安吾蔵書目録』（平成10・8、新津市文化振興財団編集・発行）によれば、安吾の蔵書には、岩波書店編集部編の写真文庫『広島―戦争と都市―』（昭27・8、岩波書店）が確認できる。また、丸木位里・赤松俊子の画集『原爆の図』（昭27・4、青木書店）も蔵書にある。

(8) 「もう軍備はいらない」の文体は、所謂「安吾もの」に代表される「巷談」というスタイルの問題（関井光男「解題」『坂口安吾全集17』平2・12、ちくま文庫）などを参照）と関わる。だが、本稿では敢えてその問題に立ち入らず、作品の読解に重点を置き、破格で支離滅裂な文体によって軍備を語ることは一体どういうことなのか、考える。

(9) 柴田優呼『ヒロシマ・ナガサキ』被爆神話を解体する（平27・8、作品社、二二七頁）。同書によれば、英語では

「アメリカの原爆使用」や「広島、長崎の原爆被災という出来事全体」を「Hiroshima/Nagasaki」または「Hiroshima」と呼ぶのが一般的で、「日本語でも最近、国際的な広がりを示すためか「ヒロシマ／ナガサキ」と書き表すことが少なくない」とされる。

(10) 小熊英二「民主」と「愛国」（平14・10、新曜社）第一章「自主独立」と「非武装中立」を参照。たとえば「読売新聞」昭和二十七年二月八日掲載の世論調査「日本をどう防衛する？」では、「講話後軍隊をもつべきだといわれていますが、あなたはこれに賛成ですか、反対ですか」という問いに対して、「賛成」五六・九％、「反対」二三・八％、「わからない」一九・三％とされている。また、「朝日新聞」同年三月二日掲載の世論調査「再軍備どう考える」でも、「いま日本に軍隊をつくる必要があると思いますか。そんな必要はないと思いますか。」という問いに対し、「必要がある」三二・％、「条件によって必要」二四％、「必要はない」二六％、「わからない」一八％とある。再軍備を求める声は当時から決して少なくなかった。「総じて世論は、再軍備そのものは賛成しても、旧軍や戦前体制の復活には強い反発を示し、アメリカの圧力には抵抗感を抱いていた」（『民主』と「愛国」四五五頁）。注（4）の武者小路実篤も、「昔の通の軍備を再建することなら反対」だが、「日本と戦争するのは損」と他国に思わせて「戦争をさける」ために、「軍備する方が安全率が多いように思ふ」と述べている。

(11) 文学者が多様な方法で再軍備について表したことは、注（3）を参照。ただし、エッセイとも論説文ともつかない形で、非論理的・非倫理的に軍備について語る「もう軍備はいらな

い」は、文学者たちによる言説地図上においても、やはり特異なものである。

(12) 小平義雄による、東京やその近郊で起きた連続婦女暴行殺人事件。昭和二〇年五月に品川で同僚の女性を強姦絞殺して以降、小平は一年四ヶ月の間に一〇名の女性に対する強姦殺人を繰り返して、一〇件の殺害のうち証拠不十分で無罪となった三件を除く七件について、死刑判決が下された。鈴木厚『戦後医療事件史』(平23・6、じほう)、内村祐之・吉益脩夫監修『日本の精神鑑定「増補新版」』(平30・12、みすず書房)などを参照。

(13) この「ケタの違うデカダン」とは、超越性に殉ずる「死」を美学化する、保田與重郎が戦時中唱えた「デカダンス」に対応している。「運命」と一体化した保田の「デカダンス」から、「墮落」を引き剥がそうとしたのが、安吾の「墮落論」(「新潮」昭21・4)であった。拙稿「墮落」と「運命」(「日本近代文学」平30・5)を参照。

(14) 安吾は「野坂中尉と中西伍長——安吾巷談の三——」(「文芸春秋」昭25・3)で、「国民全部が生活水準を高めるという唯一の目的」に向けた「無抵抗主義」の実践について、詳しく論じている。

(15) 本作で触れられている「ギャバ族」は、「戦後服装界に大流行をもたらした」「ギャバディン」(思想の科学研究会編『「戦後派」の研究」昭26・6、養徳社、一二六頁)をまとめた若者たちのことを指し、日大ギャング事件の山際啓之も逮捕時に「ミルキーハット」に「焦茶ギャバジンのズボン」のいでたちだったことが知られる(「風俗研究 ギャバ族盛衰記」(「真相」昭25・11・15)。安吾の「日大ギャング——我

が人生観(六)——」(「新潮」昭25・11)では、山際の手記に記された「ギャバ族」の言葉も引用されている。「南京虫」は金の小型腕時計の俗称で、当時密輸が問題になっていた(「税関課長ら七名を検挙」『南京虫』「密輸入」(「読売新聞」夕刊、昭27・8・1)。「密輸の花形は『南京虫』」(「毎日新聞」昭27・11・27)など)。安吾はこの背景から、探偵小説「南京虫殺人事件」(「キング」昭28・4)を執筆している。

(16) ただし、「もう軍備はいらない」は、資本主義の運動そのものから逃れ切れているわけではない。「生活自体の高さや豊かさ」を安吾が唱う際に、「高い工業技術」や「優秀な製品」が念頭に置かれており(七〇頁)。「国民全体が優秀な技術家になること」「国そのものが優秀な工場になること」(七一頁)という文言も見られる。打ち出された「生活」という指標によって、安吾は軍事—産業—資本主義におけるセキユリティの論理を逃れていくが、後の高度経済成長の論理と共振するような「豊かさ」が欲望されてもいる。消費社会を肯定していく安吾の文学的営為については、さらに検討される必要がある。

付記

原則として漢字は新字に改め、引用・参考資料の副題、傍点、ルビは適宜省略した。引用文中の傍線、「…」(省略)、／(改行)、「」(注記)は稿者による。引用文中には、現在の社会的・倫理的規範から鑑みて不適当と考えられる表現もあるが、歴史的な資料性を考慮し、表現を改めることはしなかった。なお、本稿は第二六期火曜会における報告(於同志社大学、平28・7・20)と、その後の議論に基づいている。火曜会のみなさまに感謝申し上げます。